

日 読書

月 衣食住

火 健康・シニア

火 文化・学芸

水 教育・若者

有田町の陶芸家で日展評議員の青木清高さん(56)が、天目作家として名をはせた父龍山さん(1926~2008年)の文化勲章受章(05年)から亡くなるまでを日記風につづった「陶の道 最終章—父龍山」を刊行した。在りし日の父の言動、行動から作家として、家庭人としての知られざる人間龍山像を描いている。

青木清高さん「陶の道」出版

龍山さんは生前、自分史の「ひたすらに」と「陶心一如」の2冊を出版。前者は日本芸術院会員に就任(92年)するまで、後者は文化功労者表彰(99年)までが中心だった。清高さんは人の勧めから、晩年の龍山さんの出来事を2年かけて執筆、今年7月10日の7回忌に合わせて出版した。

「陶の道 最終章—父龍山」を出版した青木清高さん



著作は文化庁から文化勲章授与を伝える一本の電話から始まる。龍山さんは県内在住者で初の文化勲章受章者となったが、周囲の喜びとは裏腹に龍山さんの妻綾子さんを病魔が襲った。清高さんは親授式を境に、明暗の生活が続いたと記す。綾子さんの闘病では龍山さんをはじめ家族の苦悩が記される。長年連れ添った妻の回復を信じながら制作に打ち込む姿や二人の夫婦愛に心打たれる。綾子さんが亡くなって間もなく、龍山さんも肝臓がんに冒される。最後まで後進の指導や創作意欲が尽きなかったことが記されている。「素顔の父」の章では龍山さんの

父龍山さんの人間像描く



青木龍山さん(右)と妻綾子さん(2004年)自宅工房で「陶の道」より

多忙な日常、孫思いの一面、仕立念碑的作品。叩きによる天目の事場での風景、夫妻のなれそめ、世界に挑み、日展特選作となっ筆まめで映像や写真に強い関心持った「豊」(71年)はその後シリを持っていてを紹介。「自」ーズ化した。分の目で見、頭で考え、作りく豊シリーズでは、73年作の「豊たいものを作らないといけな容」は赤と黒のコントラストがい、「制作することは楽しい」美しく、重厚感を感じさせる逸など父子のやりとりからは、龍品。清高さんも「父のおおらか山さんの作陶姿勢の一端がうかさが表れている」と話す。がえる。

本書では龍山さんの代表作か「花器」がダイナミックな色遣いから晩年に手掛けた作品も掲載。で勢いを感じさせる。「釉彩風日展初入選作となった「染付花舞童子皿」は童子の姿を生き生紋大皿」(54年)は有田の伝統きと描き出す。亡くなる直前まを踏まえた作品。「黒」(63年)で、作品は生命感にあふれる。は天目作品の第1号となった記清高さんは「執筆は辛いことを思い出す方が多かった」といながらも、「家の記録として次世代に伝えたかった」とその思いを語った。(成富禎倫)



日展特選作となった「豊」(1971年)口径39.8×27高さ36.4、底径18.6㎝

▶電子新聞に 複数写真

▶私家版で限定500部を発売。問い合わせは青木さん、電話0955(42)3272。